

令和５年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

南河内地区唯一の夜間定時制高校の意義を踏まえ、地域に根差した教育活動を行い、将来地域を担う人材を育成し、地域と共に歩む学校をめざす。 1 働きながら学ぶ生徒をはじめ、多様な生徒一人ひとりに対して、生徒の興味・関心に応じた特色ある教育活動を展開する。 2 生徒に基礎・基本の学力を定着させるとともに、自尊感情と自己有用感を高め、志と生活力のある社会人を育成する。 3 地域との連携を深め、地域から信頼され必要とされる人材を育成する。
--

2 中期的目標

1 確かな学力の育成と授業改善 (1) 生徒の基礎学力を向上させる。 ア 生徒の学習意欲を高め「わかる授業」を実現するため、全教科・科目において ICT 機器等の効果的な活用を推進し、授業内容・方法の改善を進める。 イ 生徒の基礎学力の定着をめざした、授業方法の開発・実践を行う。 ウ 「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした授業づくりを推進する。 エ 教員の更なる授業力向上のため、「観点別学習状況の評価」等を進めるとともに、PDCA サイクルによる授業改善を推進する。 (2) 生徒の興味・関心、進路希望等に応じた特色ある教育課程の充実を図るとともに、Web ページによる効果的な情報発信を行う。 ア 生徒の実態に応じた、基礎的・基本的な学力の定着をめざした、教育課程の充実を図る。 イ 特別非常勤講師等の外部講師を積極的に活用し、高度な技能・技術など本物に触れる教育を実践する。 ※ 学校教育自己診断（生徒）における「わかりやすい授業が多い」の肯定的回答（R2：71.9%、R3：64.1%、R4：78.7%）を令和7年度には85%以上にする。 2 生徒の規律・規範の確立と豊かな心を育む (1) 志や夢を育み豊かな人間性を涵養する。 ア 「農園実習」や「ボランティア活動」を通して、豊かな人間性や自尊感情、自己有用感を育む。 イ 「寄り添う教育」を基幹としながらも、校則の遵守や授業規律の確立など、生徒の規範意識の醸成に取り組む。 ウ 他者を理解し思いやる心や自身を大切にする姿勢を身につけさせるため、生徒向け人権学習等を積極的に行う。 (2) キャリア教育の充実、資格取得の充実を図る。 ア 教育活動全体を通じて入学時から卒業までを見据えた進路指導を行い、外部機関等とも連携しながら、正規雇用をめざした就職支援体制を整える。 イ 実践的な職業教育を通じて、社会人としての資質や能力を身につけさせるとともに、進路につながる資格取得のための支援を充実させる。 ※ 進学希望者の進学率（R2：50.0%、R3：100%、R4：100%）及び、就職希望者の内定率（R2：76.0%、R3：100%、R4：100%）ともに令和7年度まで100%を維持する。 (3) 中途退学・不登校生徒の減少に取り組む。 ア 中高連携・人間関係や居場所づくり・基礎学力養成講座等を通じて、中途退学・不登校生徒を減少させるための取り組みを行う。 イ 「課題を抱える生徒フォローアップ事業」等の活用や関係外部機関と連携し、生徒支援コーディネーターを中心とした生徒支援委員会による、様々な課題を抱える生徒への支援体制づくりや教育相談の機能を充実させ、生徒が安心して学校に通える環境づくりを行う。 ※ 生徒向け学校教育自己診断における、学校に対する満足度（R2：74.3%、R3：71.1%、R4：78.1%）を、令和7年度には肯定的回答を85%以上にする。 ※ 教育相談体制をさらに充実させ、生徒向け学校教育自己診断における「担任以外に相談することができる先生がいる」（R2：59.4%、R3：64.1%、R4：75.0%）を、令和7年度には80%以上にする。 3 学校・家庭・地域の連携と安全で安心な学校づくり (1) 生徒たちの安心と安全のための取り組みの充実を図る。 ア 校内の教育相談体制を充実させ、生徒が気軽に相談できる雰囲気づくりに努める。 イ 通学時の安全確保のため、自動車・バイク・自転車通学生徒に対して、交通安全指導を行う。 ウ 大麻・覚せい剤等の薬物乱用防止や防災等に係る教育を、教育活動全体を通じて取り組む。 エ 保健・安全衛生に関して啓発を行い、感染症や熱中症、食物アレルギー等に係る予防や事故防止に努める。 (2) 保護者や地域との連携を密にし、地域から信頼され必要とされる学校づくりを推進する。 ア 長期欠席等の生徒の状況を家庭に連絡し、保護者の協力を得るなど、家庭と連携した生徒の出席状況の改善を行う。 イ 在籍生徒の出身中学校を訪問し、情報交換等を行い、中学校との連携を深め、生徒理解や生徒支援の充実を図る。 ウ 近隣幼稚園等の園児や地域の方々を、農園の作物収穫へ招待し地域との連携を深める。また「クリーンキャンペーン」等の取り組みを通じて、地域と共に歩む学校づくりを推進する。 エ 学び直しを希望する編転入生を積極的に受け入れ、卒業まで導くサポートを行い、地域の「学び」のセーフティネットとしての定時制高校の役割を果たす。 オ 生徒が安心して学校生活を送るための合理的な配慮を推進し、「ともに学び、ともに育つ」学校づくりをめざす。 ※ 保護者向け学校教育自己診断における学校に対する満足度（R2：81.0%、R3：81.3%、R4：88.3%）を、令和7年度まで85%以上を維持する。 4 学校運営の活性化と教職員の資質向上 (1) 学校運営の活性化を図る。 ア 准校長のリーダーシップのもと、首席を中心に各分掌・学年等と密接にコミュニケーションを取りながら、PDCA サイクルによる学校経営を推進する。 イ 分掌や委員会等の活性化と効率化を図り、毎日の職員連絡会も活用しながら生徒の状況や配慮事項等の情報共有を行い、速やかな課題解決に努める。 ウ 働き方改革を推進するため、「府立学校における働き方改革に係る取り組みについて」に沿って、会議時間の短縮や内容の精査のために事前に資料配付するなど、意識改革を進めていく。 エ 学校経営の状況を、学校運営協議会等で公表し学校運営に資する。 (2) 教職員の資質向上を図るとともに、公務員として高い規範意識の保持に努める。 ア 日常的なOJTの推進、校内研修の活性化を行う。 イ 経験豊富な教職員の協力を得ながら、ミドルリーダーの育成、教職経験の少ない教職員の資質向上を図り、次世代の校内運営を担う人材の育成を行う。 ※ 校内研修・報告会・連絡会等を合わせて年間10回以上実施（R2：4回、R3：11回、R4：10回）を令和7年度まで維持し、人材の育成や情報の共有などを行う。
--

府立藤井寺工科高等学校 定時制の課程

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和5年12月実施分〕	学校運営協議会からの意見
※（ ）内の％表示はいずれも(R4→R5)をあらわす 〔回収率〕 〔生徒(63.5％→65.2％)〕〔保護者(41.7％→44.9％)〕〔教員(100％→100％)〕 回収率を向上させるため、生徒は1人1台端末を用いたフォーム作成ツールによる回答を、保護者は三者懇談時の回答を試み、いずれも微増。更なる回収率向上への工夫の検討と実践が必要。 【学習指導等】 ・生徒「わかりやすい授業が多い」(78.7％→81.0％) ・保護者「子どもは、授業がわかりやすく楽しいと言っている」(67.5％→77.5％) ・教員「教材の精選・工夫を行っている」(100％→100％)、「指導方法や学習形態の工夫・改善を行っている」(95.8％→100％) 教員の日々の取組みの成果が現れ、「わかる授業」の実現に大きく前進した。生徒の現状に対応した更なる授業改善等を進めていく。 【生徒指導等】 ・生徒「学校に行くのが楽しい」(70.5％→69.0％)、「先生は生徒達のことをよく見て対応してくれる」(83.6％→87.7％)、「先生の指導には納得できる」(77.0％→89.3％)、「人権の大切さについて学ぶ機会が多い」(82.0％→84.5％)、「社会人になったときに必要になってくることについて学ぶ機会が多い」(75.4％→84.5％) ・保護者「学校の生徒指導の方針に共感できる」(97.5％→95.0％)、「学校は生活指導の面で、家庭への連絡や意思疎通を積極的にきめ細かく行っている」(95.0％→95.0％)、「学校は生徒に生き方を考えさせ豊かな心を持った生徒を育てようとしている」(97.5％→95.0％)、「学校は子どもに生命を大切にする心や社会ルールを守る態度を育てようとしている」(97.5％→97.5％)、「学校は生徒に人権を尊重する意識を育てようとしている」(100％→100％) ・教員「生徒指導において、家庭との連携ができている」(91.7％→91.3％) 保護者との連携を密にしながら生徒に寄り添った指導等を行うことができた。生徒が更に楽しく安心して学校生活を送れるよう、引き続き保護者との連携を密にしながら生徒に寄り添った指導等を継続していく必要がある。 【学校経営】 ・教員向け学校教育自己診断における学校運営に係る肯定率(83.3％→82.2％) 今年度の結果から、本校の「強み」と「弱み」の再分析を行う。校内組織のあり方や役割分担等を見直す。日ごろより教職員間で積極的な対話が増えるような機会を増やす。次年度も准校長のリーダーシップのもと教職員の適性・能力に応じた校内人事等を行い、誰もがやりがいを感じられる学校運営に努める。 【まとめ】 次年度も引き続き、「生徒の居場所づくり」「わかりやすい授業」「進路指導」「学校施設・設備の充実・整備」等に加え、「教職員が働きやすく、やりがいのある職場環境づくり」について重点的に取り組む必要があると考えている。	〔第1回 令和5年7月14日(金)〕 ・リーディング GIGA ハイスクール事業指定校に応募した理由について →ICT 機器の積極的活用を図るため。 ・ICT 機器を用いた授業のメリットとデメリットについて →メリットは生徒の興味関心を最大限に引き出せること。デメリットは教員個々の活用スキルが問われること。また、管理者の育成も急務。 ・日本トラック協会寄贈のトラックの活用について →就職等も見据えた生徒の興味関心を引き出すために活用。 ・生徒に自分の考えを自分のことばで話せるよう育てていただきたい。 ・インターンシップ等を活用した企業との連携、グローバル社会を見据えた英語教育に取り組むなど学校経営計画、グラデュエーションポリシーを検討してみても →インターンシップにハードルが高いと感じる生徒がいる。そのため生徒の現状に応じた入学当初から卒業までを見据えた段階的なキャリア教育を実践している。英語教育については全校生徒一斉の形式では困難。 ・卒業生による進路講演会の実施について →次年度以降検討する。 ・生徒からはポジティブな意見が多くある。本校は生徒の面倒見が良い教育支援をしている。中学時代、登校に課題のあった生徒が継続的に登校できている。学校経営計画にあるとおりの実績がこの学校にあると思われる。 〔第2回 令和5年11月17日(金)〕 ・「授業アンケート結果の経年変化」における授業改善で如実に好結果が現れていること、授業改善に係る校内研修の教員負担について →職員一同、楽しんで研修に参加している。積極的な参加、意見交換が行われている。 ・毎年減少傾向にある生徒数の推移について →府立定時制高校全体の問題となっている。本校においては引き続き魅力発信に努めていく。 ・本校の中期的目標に係る地域に「求める支援」と「還元できる資源」の資料について →定時制で独自に作成したもの。 ・私立の通信制に通う生徒数の増加について →コロナ禍の前から急増している。時間を有効に活用でき、柔軟に教育を受けられる面が時代に合致しているのではないかと。 ・1人1台端末や T-NET を活用した授業は生徒にとって学びやすい環境と思うが、一方で教員の負担が増加しているように感じる。 ・地域に根付いた活動を今後も続けていただきたい。 ・やはり本校の良いところは生徒一人ひとりの面倒見が良いところ。特に対面授業は生徒のコミュニケーション力を育める。学力以外の力を育めることも定時制の魅力。広報活動に力を入れてほしい。教員研修は非常に頑張っている。 〔第3回 令和6年2月16日(金)〕 ・NPO など外部講師の活用があり、現代の社会的な課題に寄り添った内容に取り組めている。 ・生徒にブラックバイトや社会保障制度について学ぶ取組みを取り入れてはどうか。 ・「なごみカフェ」のような生徒の居場所づくりへの取組みは有効である。 ・1人1台端末活用のメリットとデメリットについて →メリットはアプリを活用すると授業準備時間等の短縮や生徒の興味関心がひきつけやすくなること。デメリットは、教員の意識や習熟度に係るギャップ解消が困難であること。 ・定数的な教員数減ではなく、生徒の実情を踏まえた教員数の増配置を協議会として要望する。 ・企業連携等は大人への憧れを育むとともにキャリア教育にもつながるので良い取組みである。 ・ICT 教育が進んでいると感じるが、社会問題となっているネットモラル等について生徒向け研修を行うと効果的である。 ・製紙業界ではデジタルも大切だが対人スキル低下が懸念されるため紙ベースと合わせていく必要があると考えている。学校内においても同様のことが懸念される。 ・進路未定で卒業する生徒を減らすよう引き続き取り組んでほしい。 ・防災教育について、夜間の災害時に生徒と地域がつながるような取組みを期待する。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標〔R4年度値〕	自己評価
1 確かな学力の育成と授業改善	（１）基礎学力向上 ア 生徒の学習意欲を高め「わかる授業」の実現	ア・「わかる授業」を実現するため、リーディング GIGA ハイスクール指定校として生徒1人1台端末をはじめとする ICT 機器を積極的かつ効果的な活用を推進し、個別最適な学び・協働的な学びを図るなど、授業内容・方法の改善を進める。	ア・生徒向け学校教育自己診断における「わかりやすい授業が多い」を、80.0％以上に引き上げる。 〔78.7％〕	ア・日ごろからの授業の振り返りに加え、広報情報委員会が中心となり ICT 機器の積極的かつ効果的な活用に取り組み、「わかる授業」の実現にまた一歩前進した。更なる授業改善等を進めていく。〔81.0％〕(○)
	ウ 「主体的・対話的で深い学び」の実現	ウ 「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざして、生徒が興味関心を持ち、対話や思考を積極的に促すような授業づくりを推進する。	ウ・教員向け学校教育自己診断における「生徒の学力・興味・関心などの個に応じた指導方法や学習形態の工夫・改善を行っている」の 95％以上を維持する。〔95.8％〕	ウ・対話や思考を促す取組みを授業に積極的に取り入れたことで、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に確実に前進している。今後も生徒の実情に応じた工夫・改善に取り組んでいく。〔100％〕(◎)
	エ 教員の更なる授業力向上	エ 教員の更なる授業力向上のため「観点別学習状況の評価」結果等をもとに、生徒個別の学習状況を把握するとともに課題や改善目標について教科会議等で共有し、恒常的な授業改善を繰り返す。また、授業見学週間を設け、教員相互の学びの活性化を図る。	エ・教員向け学校教育自己診断における「評価について話し合う機会が多い」を 90％以上に引き上げる。〔83.3％〕	エ・授業改善に係る教科会議等や授業見学週間等を設け、教員相互の学びの活性化や授業力の向上を図ったが、1人1台端末の積極的かつ効果的な活用への取組みに比重が偏っていたものとする。全体のバランスを考慮して校内研修等の更なる充実を図る。〔69.6％〕(△)
	（２）特色ある教育課程の充実 イ 特別非常勤講師等の外部講師の積	イ・特別非常勤講師や高度熟練技能者等の外部講師を積極的に活用し、生徒の興味・関心が深	イ・外部講師の実践による指導を活用し、300h 以上の	イ・生徒数が減少する中ではあるが、生徒の興味・関心が深まる授業づくりや、生徒のキャリア意識が高まる

府立藤井寺工科高等学校 定時制の課程				
	極的活用、本物に触れる教育	まる授業づくりや、資格取得指導・進路講話など、生徒のキャリア意識が高まる本物に触れる教育を実践する。	授業に関わってもらう。 [342h]	「本物」に触れる教育を実践できた。次年度も継続して取り組んでいきたい。[342h](○)
2 生徒の規律・規範の確立と豊かな心を育む	(1) 豊かな人間性を涵養する ア 「農園実習」や「ボランティア活動」を通しての教育	ア・「農園実習」や「ボランティア活動」(クリーンキャンペーン等)を通して、豊かな人間性、自尊感情や自己有用感を育み、学校生活に前向きに取り組ませる。	ア・ボランティア参加者を在籍数の 10%以上を維持する。 [15. 5%] ・LHR 等を活用した「クリーンキャンペーン」を年間4回実施する。[5回]	ア・参加生徒の豊かな人間性、自尊感情や自己有用感を育み、学校生活に前向きに取り組ませることができた。今後も継続していく。[18.0%](○) ・保健部や生徒会を中心として定期考査前日にクリーンキャンペーンを実施し、学校全体で取り組むことができた。次年度も継続していく。[5回](○)
	イ 「寄り添う教育」を基幹とし、生徒の規範意識の醸成	イ・授業規律(禁止事項…携帯電話やスマートフォンの使用、立ち歩き・私語・その他人に迷惑をかける行為等)の確立と校則の遵守。 ①全教職員による声掛け ②毎時間の校内巡回や教室入り込み及び廊下からの観察 ③登校時～下校時までの立ち番係による観察及び声掛け指導 ④担任・生活指導部等への報告	イ・生徒向け学校教育自己診断における「学校生活について、先生の指導には納得できる」を 80%以上にする。[77. 0%] ・保護者向け学校教育自己診断における「学校の生徒指導の方針に共感できる」の 90%以上を維持する。[97. 5%]	イ・生徒の規範意識の確立と向上をめざし、生活指導部を中心として全教職員が一丸となって取り組んだ。次年度も生徒に寄り添った指導等を継続していく。[89.3%](◎)
	ウ 人権学習を通じた豊かな人間性の育成	ウ・他者を理解し思いやる心や自身を大切にする姿勢を身につけさせるため、人権教育推進委員会を中心に関係外部機関とも連携しながら生徒向け人権学習を積極的に行う。	ウ・生徒向け学校教育自己診断における「①命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」「②人権の大切さについて学ぶ機会が多い」を 85%以上にする。 [①80. 3%、②82. 0%]	ウ・人権教育推進委員会を中心として関係外部機関と連携しながら生徒向け人権学習を充実させることができた。次年度も計画的に行っていく。① [79. 3%](△)、② [84. 5%](○)
	(2) キャリア教育・資格取得の充実 ア 入学時から進路指導を実施・就職支援体制整備 イ 進路につながる資格取得のための支援の充実	ア・職場体験・学校見学や面接指導等、入学から卒業までを見据えた進路指導計画のもと、生徒の希望進路実現を支援する。 イ・進路につながる資格取得の推進を通して、キャリア教育の充実を図る。生徒に対し、放課後や短縮授業期間、夏休み等を使った外部資格取得に係る講習等の案内を積極的に行う。	ア・希望進路実現率 100%をめざす。 進学[100%] 就職[100%] イ・資格の年間取得総数(延べ数)を在籍者数の 40%以上を維持する。 [52. 0%]	ア・進学希望者進学率 100%、就職希望者内定率 100%。次年度も入学から卒業までを見据えた進路指導計画のもと、生徒の希望進路実現を支援する。(◎) イ・進路につながる資格取得の推進に取り組んだ結果、資格の年間取得総数(延べ数)は在籍者数の 36.0%となった。引き続き生徒の希望進路の実現につながるキャリア教育の充実を図る。(△)
3 学校・家庭・地域の連携と安	(3) 中途退学・不登校生徒減少への取り組み ア 中途退学・不登校生徒を減少させるための取り組み	ア・中高連携・人間関係・居場所づくり・基礎学力講座等を通じ、中途退学・不登校生徒を減少させることに重点をおき、家庭はもちろん就業先雇用主とも連携を深めながら、授業への出席率を向上させる。	ア・中途退学率 5. 0%以下をめざす。[5. 2%]	ア・中退防止等に係る取り組みを行ったものの、仕事への専念や不登校(長欠)を理由として中途退学率は 7.7% 次年度は地域資源等を積極的に取り込むなど、中退防止等に係る取り組みの更なる充実を図る。(△)
	イ 課題を抱える生徒が安心して学校に通える環境づくり	イ・様々な課題を抱える生徒が安心して学校に通える環境づくりを行うため、「課題を抱える生徒フォローアップ事業」等の活用や関係外部機関と連携するなど、生徒支援委員会を中心とした支援体制づくりや教育相談の機能を充実させる。	イ・生徒向け学校教育自己診断における「先生は生徒達のことをよく見て対応してくれる」を 85%以上にする。[83. 6%]	イ・支援教育コーディネーター及び生徒支援委員会を中心として、より確かな生徒支援体制を構築することができた。引き続き生徒が安心して学校生活を送れる環境を確保していく。[87.7%](◎)
	(1) 安心と安全のための取り組み ア 校内の教育相談体制の充実	ア・いじめの早期発見・解決に組織的に取り組むとともに、多様な生徒・保護者の相談や需要数の増加を受け、支援教育コーディネーターを中心としたより一層の教育相談体制の充実と SC・SSW の積極的活用を図る。	ア・生徒向け学校教育自己診断における「担任以外に相談することができる先生がいる」を 80%に引き上げる。[75. 0%]	ア・心のケアを必要として保健室へ来室する生徒が前年の 2.5 倍、教員2名減となっている中、保健部や関係委員会等を中心に教育相談体制の充実や SC・SSW の積極的活用を図った。今後も SSW・SC と連携し、より一層教育相談体制の充実を図る。[68.4%](△)
	イ 交通安全指導	イ・通学時の安全確保のため、自動車・バイク・自転車通学者に対して、毎日の校門での声掛け時や定期的に交通安全指導を行う。	イ・交通安全指導を年間3回以上開催。[4回]	イ・生徒の通学時の安全確保のため、毎日の校門での指導を含め5回の定期交通安全指導を行った。次年度もより効果的な指導を行っていく。(◎)
3 学校・家庭・地域の連携と安	ウ 覚せい剤・大麻等の薬物乱用防止や防災等に係る教育の実施	ウ・外部関連機関や SSW 等と連携し、薬物乱用防止教室や防災教育の実施、生徒・保護者への啓発等、充実を図る。	ウ・薬物乱用防止教室を年間2回開催する。[2回] ・防災教育を年間2回開催する。[2回]	ウ・生徒の安全のため、保健部を中心として薬物乱用防止教室及び防災教育をそれぞれ2回ずつ実施した。今後も必要に応じて保護者や外部機関等とも連携しながら生徒の見守りを継続していく。(○)

府立藤井寺工科高等学校 定時制の課程

全 で 安 心 な 学 校 づ く り	(2) 家庭・地域との連携、地域から信頼され必要とされる学校づくり ア 家庭との連携による生徒の出席状況の改善 イ 在籍生徒の出身中学校を訪問し、生徒理解や生徒支援の充実 ウ 近隣幼稚園等の園児・地域の方々等、地域と共に歩む学校づくり オ 合理的な配慮の推進「ともに学び、ともに育つ」学校づくり	ア・保護者懇談会の充実や学年通信の発行、家庭訪問等、保護者と密に連絡を取り合いながら連携を深める。 イ・在籍生徒の出身中学校を訪問し、情報交換等を行い、生徒理解や生徒支援のための中学校との連携を深めるとともに、本校の教育活動の広報を行う。 ウ・近隣の幼稚園等の園児や地域の方々を、農園の作物収穫へ招待し、地域との連携を継続し本校の教育活動への協力と理解を深める。 オ・生徒が安心して学校生活を送れるよう、SC 及び SSW 等による合理的配慮を推進するための研修会を実施する。	ア・保護者向け学校教育自己診断における学校に対する満足度の 85%以上を維持する。[88.3%] イ・出身中学校全校訪問を維持する。[37/37 校] ウ・年間に 10 団体程度を農園に招待する。[8 団体] オ・合理的配慮に関する研修会を 2 回行う。[2 回]	ア・担任及び学年団が一つとなり、保護者懇談会、学年通信の発行、家庭訪問等を行うなど、保護者と密に連絡を取り合い連携を深めた。引き続き保護者との連携を深めていく。[88.9%](○) イ・[42/42 校](○) 引き続き生徒支援のための中学校連携を図るとともに、本校に通う生徒の成長や定時制高校の有用性について広報活動を行っていく。 ウ・近隣の幼稚園等の園児や地域の方々等延べ9団体を農園の作物収穫へ招待し、地域との連携を行った。地域から本校教育活動への理解と協力が得られるよう引き続き連携を深めていく。(○) オ・生徒が安心して学校生活を送れるよう、SSW・SC 等による合理的配慮を推進するための教員研修会を生徒支援委員会等を中心として3回実施した。引き続き SSW・SC や関係外部機関等と連携した研修を実施し、合理的配慮の推進に取り組んでいく。(◎)
4 学 校 運 営 の 活 性 化 と 教 職 員 の 資 質 向 上	(1) 学校運営の活性化を図る ア 学校経営の推進 イ 分掌や委員会等の活性化、生徒の情報共有、速やかな課題解決 ウ 働き方改革の推進 エ 学校経営の状況を、学校運営協議会等で公表し学校運営に資する (2) 教職員の資質向上を図る ア 日常的な OJT の推進と校内研修の活性化 イ 教職員の資質向上及び校内運営を担う人材の育成	ア・本校の課題に対する基本的な方向性を確立するため、経営会議・運営委員会・職員会議等で教職員間の意思疎通、共通理解の促進、意見交換など積極的なコミュニケーションを図り、全教職員がやりがいを感じながら、学校経営計画の目標達成に向けた進捗状況管理や達成状況・課題の検証等を行うなど、PDCA サイクルによる学校経営を推進する。 イ・学校組織に関する内規を見直し、分掌や委員会等の活性化と効率化を図り、毎日の職員連絡会等も活用しながら生徒の状況や配慮事項等の情報共有を定期的に行い、速やかに課題解決に努める。 ウ・学校掲示板やグループウェア等を積極的に活用し、会議の回数減や時間短縮、ペーパーレス化などにつながる取組を実践し、「校務運営の効率化」を図る。 また、「定時退庁」に努め、週 1 回の「全校一斉退庁日」及び「ノークラブデー」の確認、「学校閉庁日」の設定の意義など、教職員一人ひとりの意識改革を進め、教職員の健康保持・増進や長時間勤務の縮減に向けて学校全体で取り組む。 エ・めざす学校像の実現に向けて、学校経営計画の達成状況等（成果や残された課題）を明確化し、学校評価を学校運営協議会やホームページで公表し学校運営に資する。 ア・日常的な OJT の推進を図るため、校内活動にとどまらず、他校と連携した情報共有や勉強会等外部資源を積極的に活用する。また、職員会議等で研修報告の機会を設定し、簡潔型校内研修を行うことで校内研修の活性化を図る。 イ・経験豊富な教職員の協力のもとミドルリーダーの育成や、経験年数の少ない教職員の資質向上を図り、次世代の校内運営を担う人材の育成を行う。	ア・教員向け学校教育自己診断における「学校運営に教職員の意見が反映されている」を 90%以上にする。[83.3%] イ・教員向け学校教育自己診断における「本校の教育活動について、教員間で日常的に話し合っている」を 90%以上にする。[87.5%] ウ・ストレスチェック総合リスクを維持する。[90] エ・教員向け学校教育自己診断における「教育活動全般にわたる評価を行い、次年度の計画に生かしている」を 85%以上に引き上げる。[83.3%] ア・教員向け学校教育自己診断における「研修に参加した成果を他の教員に伝える機会が設けられている」を 80%以上に引き上げる。[79.2%] イ・教員向け学校教育自己診断における①「日々の教育活動における問題意識や悩みについて、気軽に相談しあえるような職場の人間関係がある」[87.5%]、②「教職員が色々なことに意欲的に取り組める環境にある」[83.3%]、の平均を 90%以上にする。[85.4%]	ア・経営会議において、前年度の「学校教育自己診断」「学校運営協議会意見」「各分掌等による総括」などから本校の「強み」と「弱み」、課題等を分析し、学校経営の推進に努めたが、管理職によるコミュニケーション不足等により教職員の意見を十分に反映させることができなかった。今年度の結果をしっかりと振り返り、次年度の学校経営を推進していく。[78.3%](△) イ・学校組織に関する内規を見直し、分掌や委員会等の活性化と効率化を図った。次年度は更なる活性化と効率化をめざし、学校組織の更なる見直しを行っていく。[87.0%](△) ウ・「校務運営の効率化」等に努め、学校全体の長時間勤務は前年度の 50%超縮減されたが、校内組織の見直しによる業務の平準化が不十分なため、ストレスチェック総合リスクは 105 となり、昨年度(90)から改善されず。学校安全衛生委員会で情報共有するとともに教職員の適性・能力に応じた校内人事等を行っていく。(△) エ・学校運営協議会等からの意見に傾聴するとともに学校教育自己診断の結果を的確に分析し、課題解決に取り組んだ。また、高性能 PC を導入し、広報情報委員会を中心としてホームページの更新・充実を図った。また、NPO 法人との連携事業を通じて、本校教育活動の外部発信に努めた。次年度も引き続き、本校の強みと弱みを明確にし、学校経営に活かしていく。[86.4%](◎) ア・人権や生徒支援、リーディング GIGA ハイスクール事業などに係る研修等を通して、校内関係組織を中心とした幅の広い OJT を実現させることができた。また、職員会議で研修報告の機会を設定したことで簡潔型の校内研修の実施につながった。次年度も継続していく。[91.3%](◎) イ・歪な年齢構成・人数配置の中ではあるが、教職員相互が適度な距離感を保ちながら職務を遂行しており、ミドルリーダーの育成や経験の少ない教職員の資質向上が図れている。次年度も教職員一人ひとり負担感を減少させるべく業務の偏りを修正しつつ、全教職員で協力し合いながら人材育成に努めていく。[①91.3% ②87.0% <u>平均</u>89.2%](△)